

中世と近世の社会の違いを大観しよう

—タイムトラベル⑥を「絵解き」する プレゼンテーション活動を通して—

長野県飯田市立飯田東中学校 田中清一

1 はじめに

『中学校学習指導要領解説 社会編』（平成20年版・以下『解説』と略記）では、歴史的分野における「改訂の要点」として、5点を示しています。そのなかで、本稿で扱おうとする帝国書院版教科書『社会科 中学生の歴史』（以下、教科書と略記）第4部「近世 武家政権の展開と世界の動き」2章「戦乱から全国統一へ」に関わる点をあげると、次の4つとなります。

- ア 「我が国の歴史の大きな流れ」を理解する学習の一層の重視
- イ 歴史について考察する力や説明する力の育成
- エ 様々な伝統や文化の学習の重視
- オ 我が国の歴史の背景となる世界の歴史の扱いの充実

本稿では、上記ア「我が国の歴史の大きな流れ」を大観する学習の充実というねらいに迫るために、イに示される歴史について考察・説明する力を、まさにそのような学習活動＝歴史について考察・説明する活動を通して育つようとする実践を提案するものです。

「何を当たり前のことを」といぶかる声も聞こえてきそうですが、しかし、この「当たり前のこと」が私自身、身にしみていないがために、授業が終わった後に自己嫌悪に陥ることがあります。どうしても「教科書見開き

2ページの内容を講義中心の授業で進める」という、学習者に豊かな学習活動を保障する、という点からは、およそそうとは言い難い授業ばかりを続けてしまう、そんなことがよくあるからです。そうなる原因は明らかなのです。「ある力をつけようとしたら、その力を修飾する言葉が表わすところの学習活動を行わなければならない」という基本原則をないがしろにした時、その時こそが、自己嫌悪に陥る授業を創っている瞬間なわけですが（ただし、講義方式の授業がすべて望ましくない、という言説に私は与するものではありません。なぜなら、調べ学習、討論学習、発表学習などさまざまな学習方法のなかに、当然、講義形式の授業も、学習の多様性を保障するものの一つとして位置づくと考えからです。要は、ある一つの学習形態や学習方法だけに特化した授業のあり方は、学習者にとっては豊かな学びをもたらすものにはなりにくいのではないか、ということです）。

以下、本稿では上記の基本原則に立って、教科書第4部2章「戦乱から全国統一へ」のおおまかな単元展開と、1単位時間の授業を提案します。1単位時間の内容は、教科書p.88～89「タイムトラベル⑥ 16世紀のようす」を、絵解きするという「学習した内容を活用して大観し表現する活動」（『解説』p.13）を取り入れた、単元終末の学習評価にあたる時間です。

2 本単元の学習構造図

『解説』 p.12には、「歴史的分野の学習内容の構造化図（部分例）」が掲載されています。これを参考に、まず本単元の学習構造図をつくってみました。

教科書第4部2章は、この構造化図では「織田・豊臣による統一事業とその当時の対外関係」「武将や豪商などの生活文化の展開」に位置づく内容が記されています。

とくに、「織田・豊臣による統一事業とその当時の対外関係」を学ぶことで、次の2点を理解することが求められています。すなわち、

- ① 中世に大きな力をもった勢力が力を失ったこと
- ② 中世までとは異なる社会が生まれていったこと

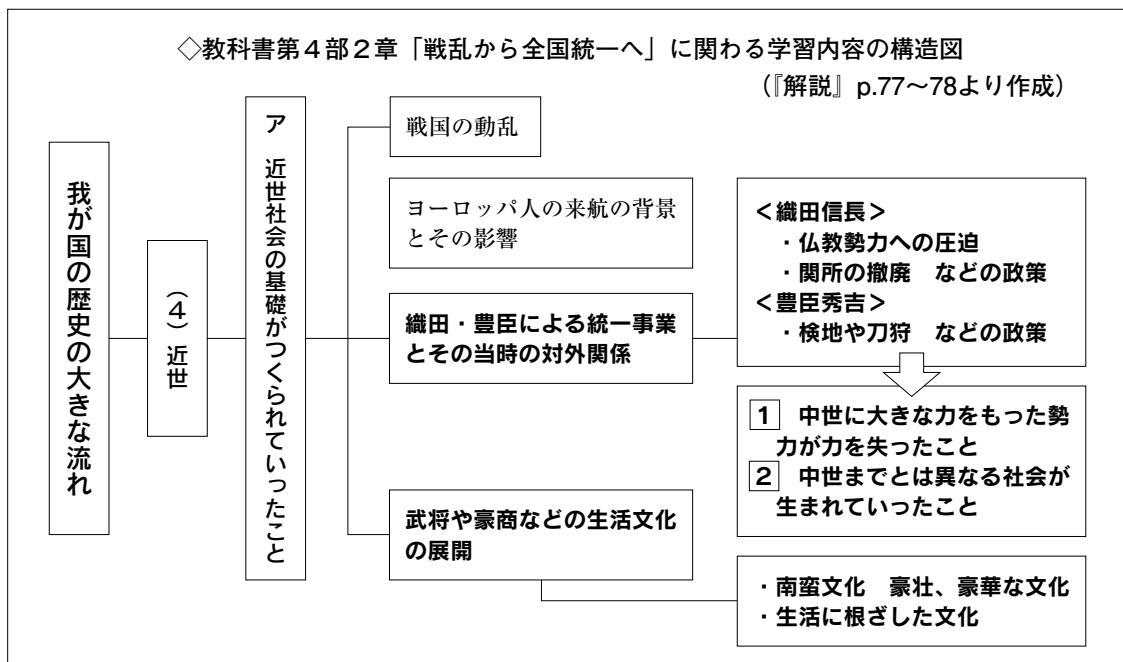
の2点です。

では、②にいうところの「中世までとは異なる社会」としての近世とは、どのような社会なのでしょう。その点を、教科書の記述

を手がかりに列挙してみます（教科書p.90～95の記述を参照）。

- A 座がなくなった社会
- B 都市の自治権がなくなったり、寺社の勢力が弱体化したりした社会
- C 下剋上・戦国の世の終わった社会
- D 荘園がなくなった社会
- E 兵農分離が進んだ社会
- F ヨーロッパ世界とのつながりが始まった社会

このように、学習構造化図をつくることで、①授業で重点的に取り上げるべき題材が明確になるメリットがあります。また、②単元終末において、その時代の特色をとらえる学習を位置づけた際、とくに上記②の中身として列挙した事項が適切に活用されているか否かを評価することが、すなわち本単元の評価活動そのものになる、ということも見えてきます。本稿ではとくに、②にいうところの「その時代の特色をとらえる学習」を本単元の終末に位置づけた授業展開を示します。具体的には、教科書p.88～89「タイムトラベル⑥ 16



世紀のようす」を、前述A～Fの事項やそれまで授業で学んだ歴史的事象を用いて「絵解き」する活動＝「タイムトラベル」を用いて時代の変化を解説する活動（1単位時間）を提案します。

3 単元「戦乱から全国統一へ」の流れ

1 信長の天下統一事業を調べ、その事業のよさや問題点を考える。(2時間)

教師が準備した学習プリントに解答し、一斉授業の中での発表、意見交換を行います。その際、先述のA・B・Fの事項については、教師が生徒の理解を確かなものにするため、必要に応じて説明を加えるようにします。

2 秀吉の天下統一事業を調べ、彼が天下統一を成し遂げられた理由を、その事業を根拠に考える。(3時間)

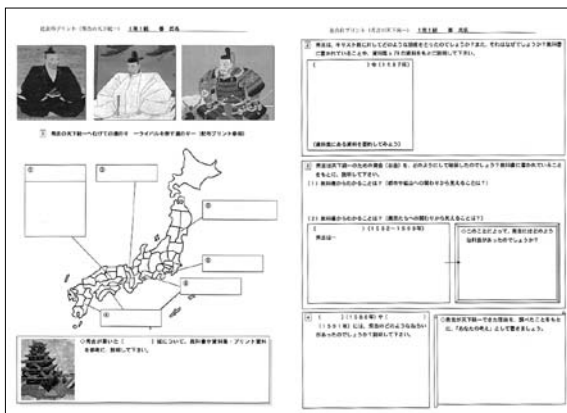


図1

教師が準備した学習プリント（図1）に解答し、一斉授業の中での発表、意見交換を行います。ここでも、とくに先述のC・D・E・Fの事項については、教師が生徒の理解を確かなものにするため、必要に応じて説明を加えます。

3 織豊時代前後の城郭について特集されたビデオ*を視聴し、教科書p.94にある城郭の

変遷（山城→平山城→平城）について具体的に知る。(1時間)

「調べる」「書く」ばかりの学習では、生徒はもちろん教師も飽きてしまいます。やはり、学習方法・形態には、常に変化をもたせたいものです。NHK総合・教育テレビを中心として、歴史を扱った長尺の番組を日常的に自宅でも学校でもビデオレコーダーで録画し、それを授業の中で視聴し、事後に学習カードや生活記録（日記）などにふりかえりを書かせ、それを教科通信や学級通信などで紹介し、共有するという一連の流れを、ぜひつくりたいものです。ただし、ビデオを見ただけで当該時代の文化史をすべて扱ったことには、当然なりません。ここでは、家庭学習として、教師が作成した文化史学習用の学習プリントや『中学生の歴史ワーク』（帝国書院教科書準拠）p.52に取り組みせたりする（後日、期日を指定して提出させる）など、自学自習を促す手立ても当然必要になるでしょう。

4 「戦乱から全国統一へ」の単元のまとめとして、教科書p.88～89「タイムトラベル⑥16世紀のようす」に描かれている事柄の中から、「近世」という新しい時代の特徴を示すと考えられる事柄をできるだけ多く選び（最低でも一人3つ以上）、これまで学んできた歴史的事象、前記A～Fの事項（概念）を用いて、「近世」という時代の特徴をおおまかに説明する。(1時間)

これは、「絵解き」といわれる、現在も浄土系の寺院で行われている、地獄絵を用いた説法にヒントを得ています。「タイムトラベル」は、各章の巻頭に位置づけられているため、単元導入時に利用することが意図されています。しかし、時代を大観するという知的作業は、大人でも困難なものです（だからこそ、未だに歴史学習といえば「要は暗記だ

*：歴史秘話ヒストリア「姫路城 美と強運の400年物語 巨大迷宮の秘密を探る旅」（2009年9月9日 NHK総合放映）<http://www.nhk.or.jp/historia/backnumber/17.html>

よ、暗記」と豪語してはばからない大人が、世の中にはあまたいるのではないのでしょうか。したがって私は、「タイムトラベル」は、当該単元の学習をまとめたりふりかえったりする場面でこそ用いるべきものだと考えます。そうすれば、既習内容を活用しながら「タイムトラベル」を「読む」(＝描かれている事項を解釈しながら・意味を理解しながら分析的に見ること)ができるはずです。

4 「タイムトラベル⑥ 16世紀のようす」の絵解きをしよう(1～2時間)の流れ

① 「タイムトラベル⑥ 16世紀のようす」に描かれている人・もの・ことについて、これまで学習した事項と対応する部分を一人ひとりが探し、図中の適切な部分に用語や説明を記入した付せん紙を貼りつける。

例「刀狩りに来た役人と思われる人々と、それに対して、おもしろくなさそうな表情でやりとりをかわす僧侶たち。この僧侶たちは、おそらく武装した僧兵たちだろう。」(「タイムトラベル⑥教科書p.89右上付近のようすについて)

② ①で行った作業を元に、一人ひとりが200字以内(教師が準備した専用の原稿用紙)で「タイムトラベル⑥」に描かれている人・もの・ことについて「絵解き」用の台本を執筆する。その際、これまで学んできた歴史上の用語、説明のための言葉(概念)を必ず盛り込む。

③ 5～6人のグループごとに、一人ひとりが「絵解き」をグループの仲間に対して行う。その際、各グループに1枚ずつ用意された、「タイムトラベル⑥」を拡大したポスターを用いて「絵解き」を行う。聴き手は、自分の「絵解き」には含まれていなかった仲間の気づきを、別の色の付せん紙に記入して、自分の「タイムトラベル⑥」図中に追加添付する。

④ 「戦乱から全国統一へ」単元の学習をふりかえって、わかったことや新たに抱いた疑問を、学習カードに記入する。

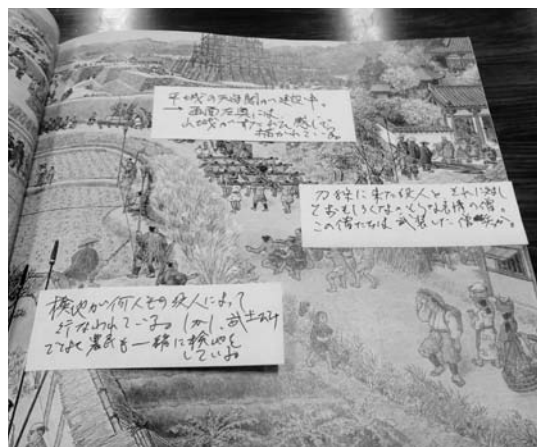


図2 付せん紙を添付した「タイムトラベル」

5 おわりに

けだし「大観」という言葉は、その道に熟達した人にして初めて行い得る知的営みのように思います。それを、生徒と教師に限られた条件(＝授業)の中で行うわけですから、その難しさは相当なものはずです。

大観とは「細かい所にとらわれず、広く全体を見渡す(して大局を判断すること)」(『新明解国語辞典』第六版)とあります。この定義に従えば、教師には授業を構想する段階で、「広く全体を見渡す」ために必要でない「細かい所」をそぎ落とす作業＝生徒に習得させるべき歴史的事項・概念を明確化する教材研究が、授業の正否を決めるものとして迫ってきます。異なる表現をするならば、「この時代の特色を説明するために必須となる歴史的事項・概念は何か」ということについて、教師自身が扱おうとする時代についての歴史観を確かにしておく必要がある、ということです。歴史観を確かにする、ということは、教師自身が日常を歴史的に(歴史的思考を働かせて)生きることを要求します。歴史の授業は、本当にしんどいものです、生徒にも教師にも。